opusdei.org

属人区長の書簡 (2010年3月)

四旬節にすでに入った今、エチェバリーア司教は今月の月において属人区長は、ことのよいて重要なことでは、日々の生活の具体的するは、日中のようのは、で神に回心するよう努力。

2010/03/07

愛する皆さん、イエスが私の娘たち と息子たちをお守りくださいますよ うに! 教皇様は、今年の四旬節メッセージ のテーマとして、正義を取り上げて おられます。ベネディクト十六世 は、「その人のものをその人に与え ること | という正義の古典的な定義 に言及し、こう説明しておられま す。「人間がもっとも必要とするも のを保証できるのは法ではありませ ん。人生をまっとうするには、まさ にたまものとして与えられる、より 内面的なものが必要です。神は人間 をご自身の似姿として創造しまし た。したがって、人間は神だけが伝 えることのできる愛によって生きて いると言えます。」[i]

人間関係において「その人のものを その人に与えること」は、正義に 適った真に人間的な社会を進展させ るために不可欠な条件です。した がって、一人ひとりが、個人であろ うと、自分の家庭や職場や市民社会 の中においてであろうと、他人に対 する義務をすべてできる限りよく果 たすよう努めるべきです。しかし、 それだけで満足することはできませ ん。聖ホセマリアは「正義に適った 行いだけで満足せずに、愛徳を実行 しなさい」[ii]と助言されました。

他者に対する義務を誠実に正しく実 行することは、それだけでは不充分 ながらも、秩序正しい市民生活の基 盤です。主は、確かに病人を癒し、 飢えている人に食物を与えることな どに留意されましたが、何よりも霊 的な飢え、つまり神に関する無知、 罪という病いなどを取り除くことに 心血を注がれました。聖アウグス ティヌスが述べているように、もし 「正義がその人のものをその人に与 える徳であるなら、(…)人間自身 を真の神から遠ざけることは人間の 正義ではない」[iii]からです。それ ゆえ創立者はこう強調されていたの です。「正義一辺倒では人類の抱え る大問題を解決することなど到底で きません。正義のみをやみくもに実

行していけば、傷つく人が出てきて 当然です。人々は、神の子としていけば、傷つく人が出てての 人間の尊厳を認めよと言うでしまで う。『神は愛』(1ヨハネ4,16)で から、全でを易して、神化しに包 をであるであれば、でするであれば、容易でであれば、容易であれば、容易であれば、容易であれば、ないのでであれば、ないのでであればなりません。」[iv]

四旬節にあたって、この考えを心に 留めることは、復活祭を準備するこ の期間の典礼が勧めている回心を実 行していくのにも役立ちます。より 正しい秩序ある社会建設のため効果 的な協力をするためには、まず私た ち自身の内側から、秩序正しく ければなりません。

ファリザイ人たちが食べ物の〈浄〉 〈不浄〉のことを問題にした時、主 はこう忠告されました。「外から人 の体に入るもので人を汚すことが出きるものは何もなく、人の中から出てくるものが、人を汚すのである。」[v] 事実、原罪と個人的な罪で傷ついている人の心こそ、様々な大きな悪の根源です。逆に、人のが恩恵によって癒され高揚されると、幾多の素晴らしい善を生み出す源となるのです。

原罪は、人間を神に結びつけ、また お互いを密接に結びつけていた原初 の交わりを引き裂いてしまいまし た。そして、個人的な罪がそ引き起 い打ちをかけ、深刻な分離を引き起 い打ちをかけ、深刻な分離を引き起 こすまでになったのです。それは面 人の中でも、また社会の多くの面で も見られることです。人間は生来、 他者に開かれた存在であっても、

「人間はその存在のうちに奇妙な引力を持っています。その引力は人間を内向きにさせ、他者に対して上位にあり対抗するべき関係にあると確信させます。これが原罪の結果であ

る利己主義です。アダムとイブは悪 魔の嘘にそそのかされ、神の命令に 背いて禁断の果実を採り、愛のうち に信頼する論理を疑いと競争の論理 に置き換えました。すなわち、神か ら受け、信頼して神に期待する論理 が、自己本位なことにしがみつき、 自分勝手に行う論理にとって変わっ たのです(創世記3,1-6参照)。その 結果として、不安と疑いという感覚 を体験します。どうしたら人間は、 この利己的な力から自己を解放し、 愛に向けて自らを開くことができる のでしょうか。| [vi]

この問いかけは、誰もが心の最も深みから望んでいることを示してでしての男女は愛によって愛によって動造されたのであり、の望みが隠されているかの望みが隠されているか、清くしても、誰もとしても、な愛で心を満たすことを切り、無秩序に見ないのさいゆるすことなく、神と

神ゆえに他者に与えつくすことを望んでいるのです。けれども、このことは、私たちの心を癒し、強め、高揚することができる恩恵によっての思ってなことです。そして、この恩恵を私たちにふんだんに与えるものは、何よりもゆるしの秘跡とご聖体の秘跡なのです。

この四旬節には、定期的に与るゆる しの秘跡の準備をよりよくすること と、毎日のご聖体拝領の準備に磨き をかけることを通して、霊的刷新の 望みを強めましょう。さらに、付き 合っている人たちが同じ道を歩むよ う、できる限りの働きかけをしま しょう。教会が四旬節のために勧め ている事柄を、どのように実践する か具体的に決めましたか。主と聖母 との交わりを求めましょう。償いの 精神を寛大に実行しましょう。人を 助けるための具体的な目標を決めま しょう。そして何よりも使徒職にお いて、人々が過越の実りを頂くため

のよい準備をできるようにみちびき ましょう。

この歩みにおいて重要なことは、 日々の生活の具体的な点で神に回心 するよう努力することです。この絶 え間ない改善は、小さな事であって も大きな事に対するのと同じ決意で なされるのであれば、私たちの聖化 にとってたいへん重要なことになり ます。主は、私たちの中でこの変化 を生じさせようと熱望しておられま すが、私たちの個人的な協力を必要 とされています。聖アウグスティヌ スの言葉を思い出しましょう。「神 は、あなたをあなたなしで告られた が、あなたなしではあなたをお救い にならない。」[vii]

聖霊の力によって日々実現される小さな進歩を通して、私たちは自分の心をいっぱいに開くようになり、恩恵に清められ、神と隣人への愛に燃え立つようになります。ですから、

聖ホセマリアが述べたように「今年の四旬節をただ典礼暦年の一季節が巡ってきただけだと考えてはなりません。神の御助けを受け入れるべき唯一無二の時なのです。イエスは私たちの傍らをお通りになります。そして私たちが、今日、今すぐに生活を改めるのを待ち望んでおられます。」[viii]

聖書の中では、〈正義〉という言葉 が神に関して語られるときには、非 常に深い意味を持つことについて考 えてみましょう。この意味で、正義 は何よりも神の聖性を表していま す。それは、聖パウロのローマ人へ の手紙で教えているように、イエ ス・キリストへの信仰を通して、主 が無償で私たちにお与えになるもの です。「そこには何の差別もありま せん。人は皆、罪を犯して神の栄光 を受けられなくなっていますが、た だキリスト・イエスによる贖いの業 を通して、神の恵みにより無償で義 とされるのです。神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです。」[ix]

信仰によってイエス様と一致し、秘 跡に与ることによってのみ、私たち はこの聖性を手にすることができま す。この聖性は、主が私たちの罪ゆ えに十字架上で死去され、そして私 たちを義とするためによみがえられ たことによってもたらされたので す。「ここに私たちは神の義を見出 します。それは人間の正義とは深遠 な意味で異なるものです。神は私た ちのために実に膨大な代償を御独り 子において支払われました。十字架 において示された正義を前にして、 人間は反発するかもしれません。な ぜなら、人間が自己充足的な存在で はなく、完全に自己実現するために いかに神を必要とするかが、それに

よって明らかになるからです。キリストへと回心し、福音を信じることは、究極的に次のことを意味します。それは、自らが他者と神を必要とし、神のゆるしと神の親しさを必要としていることを悟り受け入れるために、自己充足の幻想から脱することです。」[x]

この文脈によって、創立者がまず模 節によって、「放蕩息子の役割」を 日々自分の生活で再現するよう絶え ず説いていたことが、何とよく理解 できることでしょう。これはいつ も、特にこの四旬節には、立ち戻ら なければならない教えです。「人間 の一生とは、ある意味で、何度も御 父のもとに戻ることだと言えます。 新たに生活を立て直すという堅い決 心と痛悔の心をもって主のお住まい に立ち返ることなのです。そしてそ の決心は犠牲と委託に表れるはずで す。罪を告白してゆるしを受け、キ リストを着ることのできるゆるしの

秘跡を通じて御父のもとに帰り、キリストの兄弟、神の家族の一員となるのです。

私たちにはそんなにしていただく値打ちはないのですが、放蕩息子の父のように、神が大喜びで迎え入れてくださるのです。心を打ち明けて御父の家を懐かしく思慕するだけでよいのです。恩知らずの私たちであるのに本当にご自分の子にしてくださった神の賜に驚き喜びさえすればよいのです。」[xi]

母なる聖母と、その浄配聖ヨセフと 親密に接しているなら、疲れこの道をたやすく歩むことがってとうになるでしょう。ママこのオプス・でありてこれがでいて、深い信頼を持ってそりでおいて、頼みましょう。オプスに望れたといる献身の更新を切実に望れたという。あらためて心動かされた聖

ホセマリアの別の言葉があります。 より深く吟味すべき言葉です。オプ ス・デイにおける女性との使徒職開 始に言及して、娘たちにこう言われ ました。「オプス・デイは男性のた めだけだと考えていました。決して 女性を嫌っていたわけではないので す。 (…) しかし、神のみ旨は全て 果たすことを熱望していたにもかか わらず、1930年2月14日以前は、オ プス・デイの中にあなたたちが存在 することをまったく知らなかったの です。」[xii] 娘たち、息子たちよ、 いつもこの心構え、つまり神のみ旨 を果たす望みを深めようとしていま すか。キリスト者としての行動を意 味あるものにできるのは、ただこの 望みがあるときだけであると理解し ていますか。

先月、司祭年に当たって大司教様からの招待があったバレンシアと、バレアレス諸島マジョルカ島のパルマに駆け足の旅をしました。いずれも

23日は、愛するドン・アルバロの帰 天記念日です。いつも私たちを聖母 のもとへ行くように励ましてくだ さったその忠実さを思い起こし、こ のマリア年の恩恵が皆さんの心に深 く染みこむように、一人ひとりが個 人的にその取次ぎを願うように、皆 さんに勧めます。 月末の28日は、創立者の司祭叙階記念日を祝います。教皇様とその協力者の方々、他の司教方と世界中の司祭のため、司祭と修道女の召し出しのため、またイエス・キリストが御血を代償にして獲得してくださった[xiii]神の民全体の聖性のために、創立者に願いましょう。

心からの愛情を込めて祝福を送ります。

皆さんのパドレ

†ハビエル

ローマ、2010年3月1日

[i] ベネディクト十六世、2009年10 月30日『2010年四旬節メッセージ』

[ii] 生ホセマリア、『知識の香』77

<u>[iii]</u>聖アウグスティヌス、『神の 国』19, 21. [iv] 聖ホセマリア、『神の朋友』172

[v] マルコ 7,15.

[vi] ベネディクト十六世、2009年10 月30日『2010年四旬節メッセージ』

<u>[vii]</u> 聖アウグスティヌス、説教 169,13(PL38,923)

<u>[viii]</u> 聖ホセマリア、『知識の香』59

 $[ix] \square - \neg 3,22-25.$

[x] ベネディクト十六世、2009年10月30日『2010年四旬節メッセージ』

[xi] 聖ホセマリア、『知識の香』64

[xii] 聖ホセマリア、1974年7月11 日、家族の集いにおけるメモ

[xiii] 1コリント6,20; 7,23参照

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/shuren-qu-chang-noshujian-2010nian-3yue/ (2025/12/11)